教員養成課程音楽専修コース・芸術文化課程音楽文化コース専門教育科目
科目名　音楽史（日本の伝統音楽・諸民族の音楽を含む）
タイトル　　音楽史　教科書を変更して

科・岸　啓子

１．授業の概観

音楽史の目的は、音楽の歴史を概観し、その基礎知識を得ること、内容は、西洋音楽史主体に日本の伝統音楽と民族音楽を加えたものである（免許指定）。音文カリキュラムマップでは、基礎に位置し、2 年生後学期に履修する。

これまでの教科書は、優れて便利なものであったが、学生の基礎学力の低下に直面して、基礎基本の知識・理解を養うために、今年度から新教科書に変更した。利点は次の 3 点である。

1. 見開き 2 頁読み切りで、事象を把握しやすい。
2. CD の付録により自習可能。
3. 説明が具体的である。

音楽関連授業の難しさは音楽という言葉を持たないものを言葉で語る点にある。音楽は音の組合せ・構造物であり、そこにはモチーフや旋律法・和声法・構造・形式といった、音の組み立ての仕組みがあり、それらを語る音楽用語がある。音の構造体としての音楽を語る言語（専門用語と感性言語）を磨くために、学生自身の発表は貴重な体験となるので、調べ学習と発表を課している。

２．授業評価法

質問紙による５段階評価法による。質問項目は共通教育のモデルに基礎を置き、銑魚の特徴にあったものを加えた形式である。

５段階

５強くそう思う　　４そう思う　　３どちらとも言えない　　２そう思わない　　１強くそう思わない

問１　あなたはこの科目にきちんと取り組みましたか。
問２　あなたの出席状況は良好でしたか。
問３　授業の目的は授業の中で明確でしたか。
問４　授業内容･規模は適切だと思いましたか。
問５　ＬＤやＣＤ，ビデオ等の使用は適切でしたか。
問６　教員の説明はわかりやすかったですか。
問７　授業の中で発表や質問の機会は与えられましたか。
問８　発表に意欲的に取り組みましたか
問９　この授業のレベルはあなたにとって適当でしたか。
問１０　この授業により、自分の考えが培われたり、得るところがありましたか。
問１１　この授業を受講したことが、今後音楽・美術等を学習する上で、有意義であると思われますか。
問１２　私語がなく（少なく）、授業の良好な雰囲気が保たれていましたか。
問１３　この授業のシラバスをよんだことがありますか。
問１４　初年度（１年次）にこの授業があるほうがよいと思いますか。
問１５・１６　改善点・評価点（自由記述）

３．授業評価結果

問	5	4	3	2	1
1	7	8	1	0	0
2	12	3	1	0	0
3	2	10	2	2	0
4	3	11	1	1	0
5	6	7	2	1	0
6	3	8	3	1	1
7	10	4	2	0	0
8	7	7	1	1	0
9	1	5	8	2	0
10	4	8	3	1	0
11	5	8	3	0	0
12	5	6	3	0	1
14	3	4	6	2	1

免許科目であるので､出席状態は良好であった（１と２なし）。しかし、取り組みは５評価が５名減であるのが残念である。目的の明確さについては１４名が好評価であったが、２評価も２名あった。授業内容も大体適切であると受け入れられている。

発表の機会を２回設けたが意欲的に取り組めたとする自由記述が目立った。学生のプレゼンはかなり充実していた。また音楽を聴く機会を多く設けたことも評価されていた。記述にはなかったがし聴取態度・内容とも過大は多い。ただ多量に聴くだけでは趣味の世界から脱却できないためである。

４．まとめ

新教科書は学生に親しまれたが、試験結果は悪かったので、所期の目的は達成できていない。来年は授業毎のミニテストでの補強を考えたい。

科目区分　芸術文化課程専門教育科目（選択必修）
科目名　　音楽文化論
タイトル　24 年度内容の大幅改編にむけて

音楽科・岸　啓子

１．授業概要

芸術文化課程音楽文化コース・造形芸術コース学生が受講する課程共通科目である。授業の目的は時代や社会の中に現れる音楽文化の諸相を理解し、民族・地域・社会・経済・技術等との関連の中で音楽文化の意味と役割を吟味する事である。授業の具体的内容は、20 世紀に生まれ、最盛期を迎え、やがて解体したロックを例に、音楽的特徴と社会的・経済的・政治的なもの関連を、時代の中で読み解くことである。しかしこの内容は今年で打ち止めとする。講義を始めた数年前はインディーズ全盛期で、ロックは若者の音楽文化であったが、今やジャンルとして消滅寸前である一方、すべての音楽にロック的要素が浸透し、ロックを語る共通基盤が失われてしまった。その間、デジタル化・音楽聴取の個人化で音楽産業は大躍進を遂げたと思う間もなく凋落して不況業種となり、初音ミクがキャラクター認定されて人気アイドル化し、フェミニズムによる音楽の読み直し、脳科学による音楽の作用の解明等、音楽文化はめまぐるしく、雑多に展開した。文化相対主義は西洋芸術音楽を「永遠」とする「芸術の神話」を崩壊させた。この状況下、内容を如何に現代化するかが、自分にとっての喫緊の課題である。

そんなわけで今年度は『ロックミュージックの社会学』を教科書とする最終年度の授業となった。しかし『ロック』が提示したわくわくするような音楽文化的パラダイムシフトを明示する教科書はまだ見いだせず、24 年度は主教科書なしの航海となってしまう。

２．授業評価法

質問紙による５段階評価法による。５段階
５強くそう思う　～　１強くそう思わない
問４　教科書は役に立ったか
問１１この授業は今後に有意義か
問１２個別発表に興味が持てたか
それ以外の質問は音楽史と同じであるので省略する。

３．授業評価結果

回答者数
芸文２年　20 名　それ以外２年１名

シラバスを読んだ 14、読んでいない 6

問	5	4	3	2	1
1	3	7	10	1	0
2	9	5	5	1	1
3	3	8	8	3	1
4	4	14	3	0	0
5	4	12	6	2	1
6	6	11	3	1	0
7	8	9	2	1	1
8	7	10	3	1	0
9	2	9	8	5	1
10	5	8	7	1	0
11	8	11	1	1	0
12	19	2	0	0	1
14	3	8	6	4	0

３．結果と考察

音楽文化論は授業目的の解りやすさ評価が他の授業例えば音楽史より常に低く出る。昨年改善したが、今年は悪化し３：８名、２：３名となった。反省点である。レベルはバラツキがでてしまった。出席は良好であるが（５と４：１４名）、それが意欲的取り組みにつなげられていない（５と４：１０名）。学生の発表は工夫されており、興味も持てたようだ（全員５と４評価）。授業の意義（問１１：５と４評価１９名）を認めている学生がかなりいるので、内容を改めて、より伝わる授業をしたい。自由記述では、美術と一緒にできたのが良かった、という内容が例年より多かった。

４．まとめ

音楽文化論の内容がやっと自分なりにまとまってきたと感じられた矢先に、内容の陳腐化に襲われてしまった。クラシックは１０年で内容を入れ替える必要に迫られることはない。授業方法やどのように授業するかも大事だが、授業内容・教材を最適に更新することもそれに劣らず重要である。ただ、次に内容をどう更新するかという教員の迷いを目的が明確でないとした授業評価は反映していると思われる。内容を精選して授業に臨み、24 年度もおなじ質問で評価を行ってみたいと考えている。